

アナログレコードの方が CD より良い場合もあります

アナログレコードの音質は CD の音質を凌ぐという意見もありますが、その言い方はあまり適切ではないと思います。

例えば（音質の良し悪しのひとつの重要な指標である）S/N 比については CD が有利、一般的な CD プレーヤーの S/N 比は 110dB 以上です。音楽 CD の規格(16bit/44.1kHz)から計算される理論値 96dB に近い値が期待出来ます。

しかし一方のアナログレコード再生システムはどうでしょう。精一杯頑張ってオーバーオールで 60dB というところではないでしょうか。

クラシックの場合「ピアノシモ」がありますので、ノイズフロアが低くダイナミックレンジを大きく取れる方が高忠実度録音・再生という点ではどうしても有利です。

しかし、別の意味での音楽の高忠実度再生ということになると状況は変わります。

例えば 1950～60 年代のジャズの録音について、これをデジタルマスタリングして制作された CD がオリジナルレコード盤を凌ぐかということ、とてもそうは言えないこととなります。

また、こうしたことはオリジナル・マスターテープから制作されている再発盤のアナログレコード盤についても言えることです。何しろ当時とはカッターヘッド、レコード盤の材質も違ってきますから無理もありません。

しかし再発盤とはいえ CD に比べればオリジナルの雰囲気はより濃く残っていることが期待出来ます。言うなれば「セカンド・ベスト」です。

ただし最新の J-POP（録音・制作はフルデジタル処理）をアナログレコードで出す意味はあるのか？という、それは無いのではないのでしょうか。もし音源が 24bit/192kHz あるいは DSD 録音の場合、楽曲の高忠実度再生という観点からすれば 24bit/96kHz あるいは普通の CD として発売する方が理に適っています。

そもそも CD は記録媒体としてはアナログレコードなどに比べてはるかに優秀です。楽曲をチェックしたり BGM として音楽を流すには申し分ない有り難い代物です。

ところが音楽を楽しむ、音楽に向き合うということになると問題があります。

「コンパクト・ディスク」という利点が逆に仇となります。アナログレコードの場合はジャケットそれ自体が芸術作品といってもいいのですが、CD のジャケットでは小さ過ぎて単なる記録になってしまいます。

このように常にアナログレコードが CD に比べて優位なわけではありません。あくまで聴きたい音楽のジャンル・年代によって使い分けるべきだと思います。

さて、音質の問題ではありませんが、アナログレコードの再生システムには操作可能な部分が沢山あります。工夫次第で僅かでも再生音質の向上を図れる楽しみがあるということです。

これは、例えば釣りの世界でも同じことが言えるのではないのでしょうか。

ニジマスの釣堀でイクラを餌にすれば誰でもニジマス釣り上げることが出来ます。

しかしこれでは面白くない。大自然の中で知恵を絞り工夫と経験を重ねて難物のイワナに挑戦する方がはるかに大変だろうけれど余程面白いだろうと思われれます。

便利で快適ということは大いに尊重しますが、趣味の世界はむしろ逆なのではないかと思う次第です。

付記：

一般的にアナログレコード再生システムは（音楽 CD 再生システムに比べて）「お金が掛かる」と言われています。

しかし実態はそうでもありません。低価格なレコードプレーヤーも存在しています。

より適切な言い方をすれば、アナログレコード再生システムは価格の幅が広いということではないでしょうか。また音楽 CD 再生システムに比べて生産台数がはるかに少ないので割高であるということだと思います。

また、アナログレコード再生システムの場合、高価な新素材あるいは物量の投入、手間のかかる精密加工が音質にすぐ影響します。別の言い方をすると CD 再生システムのようにソフト的な仕組での「逃げ道」がありません。こうした事由で高価なターンテーブル、トーンアーム、カートリッジなどが存在してしまうわけです。

信号処理デバイスの進歩、大量生産によるコストダウンの恩恵をおおいに受けている CD プレーヤーについても、もし微振動による音質劣化に対処しようとする頑丈で物量投入型のディスク・ドライブメカを採用せざるを得なくなります。

こうなるとアナログレコードと同じようなことになり機器は大変高価になってしまいます。